

「ダムとカワウソに関する韓日ワークショップ」

「ダム建設における湿地動物の生息地評価技術に関する韓日ワークショップ」という少し長いタイトルの会議が2月 20 日にソウル市内の梨花女子大学で開かれました。難しそうな名前ですが湿地動物とはすなわちカワウソのことで、発表の多くはカワウソについてでした。主催が「ダム地域自然環境影響評価技法と保全・復元技術開発チーム」となっており、韓国における 21 世紀フロンティア研究開発事業の一つである「持続可能な水資源確保技術開発事業」から予算を得ているようなので、カワウソという特定種の名前は出せなかったのでしょう。

こうした事情が無くても韓国におけるカワウソは自然環境保全の象徴種としての地位を固めており、日本におけるイヌワシのような存在になりつつあるようです。江原道ではかなりの規模のカワウソセンター設立準備がはじめているようで、それに関わっている慶南大のハン・ソンヨン(韓 盛鏞)先生は現地から駆けつけてこられました。また、参加者の一人であるイム・ケスンさんは忠州市付近のダル(カワウソを意味する「獺」だと思います)川の河川環境保護を目的として本年8月にカワウソをテーマにした国際会議を企画されているとのこと。いただいた忠州環境運動連合の名刺にはカワウソのロゴが使われていました。

ワークショップは韓国3件・日本2件の発表と討議からなる小規模なものでしたが、韓国側討議出席者(下記)には韓国水資源公社、環境省、および自然保護団体が含まれており、研究・開発・NGO・行政が参加したラウンドテーブルはすっかり定着しているようです。水資源公社の李さんは、江原道の東河ダム建設についてカワウソがダム建設中止の一因となったことを紹介されました。

ユ・ミョンホ	環境部(省) 国立環境研究院 野生生物課長
ウォン・チャンマン	環境部(省) 国立環境研究院 野生生物課
ノ・ヨンテ	韓国自然情報研究院(自然保護 NGO)
ハン・ソンヨン	社団法人韓国野生生物研究所/慶南大 生物学科
イ・ソンウ	韓国水資源公社 ダム環境部 建設環境部長
イ・サンドン	梨花女子大 工学部 環境学科
チョン・スンフン	暎園大 都市計画造景学部

今回印象に残ったのは、カワウソ研究が広がりを見せはじめていたことです。これまで韓国のカワウソ研究者は慶南大の韓先生のグループに限られていたのですが、今回は国立環境研究院や梨花女子大など中央でも研究がはじまっていたことです。また今回の中心人物であるイ・サンドン先生をはじめ 30 代~40 代の米国留学組研究者がほんとに元気で自信にあふれていることでした。

日本からは私と武蔵工大の田中 章先生が参加したのですが、田中先生がイ先生にはじめて出会ったのは昨年12月に東京で開催された日韓環境アセスメントワークショップとのこと。興味のあるテーマを持つ人とはすぐにネットワークをつくりあげてしまう素早い対応能力もこの世代の人たちの特長でしょう。

韓国側発表の中で、国立環境研究院のウォン・チャンマン(元 昌萬)先生は過去5年間の韓国各地の足跡調査や糞収集を通じて、どのような環境要因がカワウソの生息に影響するかを分析して示されました。糞分解速度の季節差が考慮されていないなど処理に少し問題点も感じましたが、これまでの韓国カワウソ研究が記載中心だったのと比較すると、こうした分析は大きな前進といえるでしょう。また、一部の河川において夏季のカワウソ食餌中に魚が極端に減ってカニが増えることがあるとされたのは、河川水量の影響として私には興味深い結果でした。最後に、保全策として現在の生息地が分断されているとの判断から、国内再導入が必要かもしれないと述べておられましたが、個人的には少し違う状況判断を持ちました。慶南大のハン先生は既に国際学会などで発表済みのカワウソ体内の重金属分析結果を話されました。各地の委託調査結果など最新のデータも持っておられるはずですが、今回は他の発表者に遠慮されたのか、そうしたことは触れられませんでした。

梨花女子大からは、この春に大学院へ進学したばかりのチョ・ヒスンさんが韓国におけるカワウソのホットスポットといえる場所はどこであるか(江原道の東河やネリン溪流、慶北道のワンペ溪流やウンゴク溪流、巨済島の北長木、全羅南道のソムジン江)を文献調査から紹介するとともに、巨済島の延草ダムや九川ダム付近における糞分布結果を発表されました。この研究は始まったばかりで巨済島の調査も1~2月に行ったばかりと内容的に見るものは少なく、今後の研究計画も生態・行動・遺伝解析・保全と知っていることをすべて盛り込んだような内容でした。しかし、こうした元気のよい研究者の卵が「研究成果が出ていないから」などと物怖じすることなく、自信を持って発表するには圧倒されました。何より驚いたのは学生の英語力です。思わずどこかで留学経験があるのですかと聞いてしまったのですが、学校で普通に勉強しただけとの返事(「普通」の程度が日本の学生とは桁違いなのでしょう)。こうした若い人たちと日本の学生が競争して日本が勝ち残ってゆけるのかと考え込んでしまいました。

田中先生は環境の定量化手法について話されました。とりわけ、HEP(Habitat Evaluation Process)とHSI(Habitat Suitability Index)が日本でしばしば混同されることについてHEPはHSI(生息地の質)に空間量と時間量をかけ合わせて出てくるものであることを説明されるとともに、HSIは学術的にはあまりに単純すぎるし、逆にコンサルタントにとっては現在のHSIレベルでも実用に供

すには面倒すぎると現実面の問題を指摘されました。また、わが国ではHEPをはじめとする各種の評価手法がどのような背景の中で生まれてきたのかといったことを勉強せず、すぐに HSI 評価式の改良といった細部に話が進んでしまうことが問題であるとも強調されました。卒論でリス HSI の検証を学生にやらせたばかりでしたから耳の痛いところでした。質問はやはり定量化手法に集中し、韓国でもこの分野が大きく注目されていることが感じられました。

私の方は日本の事例をもとに、カワウソ保護は必要と気がついたときには既に手遅れであり、皆がまだ普通に生息していると思っているうちに始めねばならないこと、またダム湖はカワウソにとってマイナス面だけでなく、水資源確保とうまく連携させれば生息地保全の核として使える可能性のあることを強調して話したつもりです。

参加者中には慶南大の卒業生で現在はソウルの環境調査会社である韓国自然環境研究所に勤務しているチェ・ビョンジン(崔 秉進)さんの顔もありました。彼は学生だった 10 年ほど前には私たちのカワウソ調査を手伝ってくれたのですが、現在は NGO としての活動も行っているとのこと。彼の勤務するような環境調査会社は 10 年前にはとても韓国で成り立つと思えませんでした。韓国では環境影響評価の調査を大学の先生がコストを反映しない価格で請け負うケースが多く、正当な対価の必要な会社ではやってゆけないと感じていたからです。また、出席者のウォン先生は韓国動物研究の大御所であるウォン・ピョンオ先生のご子息とのことで、米国留学後に現職に就かれたとのこと。今回はいろんな面から時代の流れを痛感しました。

最後に、会場となった梨花女子大の印象を少し。名門大として有名な同校は工学部まで有する学生数 16,000 人の総合大学で、いわゆる「女子大」のイメージではありません。女子大を感じさせるのは正門付近の街が女性向きファッションショップで埋め尽くされていることと、男子トイレが小さいことくらいでしょうか。学内の自然史博物館は専任の技官をかかえる立派なもので、訪問時には小学生の団体が熱心に標本をスケッチしていました。案内状には宿舎が学内女子寮となっていたので期待していたのですが、食堂以外に学生エリアとゲストエリアの共用部分はありませんでした。しかし日本からの留学生は多く、「田中」さんだけでも何人も滞在中とのこと。短期の韓国語研修コースに参加している人もいるようでした。語学研修の授業料は2週間 64 時間の短期集中コースで5万円、2ヶ月 200 時間コースで12万円ですので、学食の食費と月5万円程度の寮費を加えてもキャンパス内で勉学にいそむかぎり、日本で駅前留学するよりはるかに安く本場で言葉が学べるでしょう。なにより、上記のように元気な韓国学生と交流することは日本国内では得られない刺激になると思います。

(東京農業大学 農学部 野生動物学研究室 安藤 元一)



ワークショップ会場



梨花大 自然史博物館



宿舎の女子寮